

Title	K・ライター著、高山真知子訳『エスノメソドロジーとは何か』
Sub Title	K. Leiter, "A primer on Ethnomethodology", trans. M. Takayama
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.11 (1988. 11) ,p.151- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881128-0151">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881128-0151</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の諸論点について見解が明確になり、種々の有益な示唆を受けることができた。もっとも、若干の残された問題として、私自身の個人的関心もあるが、株式会社の設立における発起人の権限——この問題がまた設立に関する諸問題の解決に影響する——、あるいは、取締役の退職慰労金について商法二六九条を適用するとしても、株主総会の決議方法について判例・学説の見解が対立するので、これについて著者の見解を明らかにしてほしかった。なお、本書において、アメリカ会社法において形成された重要な取締役の経営判断の原則 (Business Judgment Rule) が、しばしば引用されているが (二〇六頁、二二五頁、二二六頁)、この原則の意義・内容について若干説明することが、読者にわかりやすいのではないかと思われる。本書に対する若干の要望を付言させて頂いたが、私にとっても、参考となる貴重な著書である。

(昭和六三年六月一五日・三嶺書房株式会社)

加美 和照

K・ライター著、高山眞知子訳

『エスノメソドロジーとは何か』

Kenneth Leifer, *A Primer on Ethnomethodology*  
(Oxford University Press, New York, 1980).

バーンズにより構築された構造機能主義理論をこれまで培われてきた社会学理論の代表とみなし、その実証主義的性格を強烈に批判することで従来の社会学に内在する因果論的前提を厳しく問い詰めてきたのがエスノメソドロジーに携わる人達の主張であると一応のまとめをつけることは、社会学の研究に携わる者にとってはそれほど困難なことではあるまい(例えば、Wes Sharrock and Bob Anderson, *The Ethnomethodologists*, Ellis Horwood Limited and Tavistock Publications, 1986)。<sup>\*)</sup>しかしながら、それら批判の核心に含まれるところの、社会学の存立基礎を揺るがしかねない方法論上の問題提起に対しては、多くの社会学者がなにかの距離を置いて見てきたようである。それは、エスノメソドロジーが社会学のなかで最も新しいアプローチであるがゆえに、単にいまだ親しみが持たれていないというだけの事情ではない。むしろ、エスノメソドロジーについては種々の紹介もあり、様々に論じられてはきているのだが、な

か捉え所のない秘密めいた研究という印象が、評者も含めた大方の感觸ではなからうか。そして、このように思われてしまう理由のひとつは、エスノメソドロジの訓練を受けていない者には(評者のように社会学の研究に従事していたとしても)、現象学的視角に基づく独特の用語法が煩雜に過ぎると感じられることが多く、その結果ときには言葉の森に迷いこんで全体構成の理解を避けてしまうこともあり、エスノメソドロジが持つという方法的に革新的な主張を見落してしまうことにあると思われる。

本書はその序文にも示されているように、エスノメソドロジが全体として有する根本的問題提起の理解が容易となるように意図された入門書である。この意味で、入門書とはいいいながら注目すべき文献と言えよう。まずは、エスノメソドロジが持つ知的エネルギーがどれだけ生き生きと伝わってくるか内容を見てゆくことにしたい。ただし、著者自身による簡潔なる論点紹介が序文で与えられ、また訳者による的確でわかりやすい内容整理があとがきに付されていることもあり、以下では評者の《思い込み》を含めたなかば虫食いの紹介になることをお許し願っておかなければなるまい。

第一章では、エスノメソドロジとは、「人びとが知っている」と思い込み使用している事柄、つまり「日常知」(二頁)の研究にはかならぬことが提示されている。すなわち、これまでの諸理論のように日常知を分析の対象にはならぬ残余範疇と見

るのではなく、むしろこの日常知こそ分析を要する対象であると考えられてくるのである。そして、このために着目されるのが、(1)一連の身近な知識(日常生活にかかわる諸知識)、(2)日常生活の自然的態度(事実としての社会的リアリティ)、(3)日常的思想法(見方の互換性と意味の適切性の体系が一致しているという考え方)、という日常知の三現象であると強調されている。第二章では、かかる視点の変更を必要と考えるに至るその理由が述べられている。社会的に構築されたものとして捉えられる社会的リアリティを、人々がいかに目に見える形にしているかを記述するエスノメソドロジの研究は、これまでの社会学がなおざりにしてきたところの、人々が意味を構築するために用いる方法を明らかにすることにはかならぬという。それゆえ日常知の研究は、たとえば社会規範の意味を人々がいかに判断し、行為の基礎としてどの規範を用いようと判断するかという、意味の適切性の問題を解くには不可欠な作業となり、社会が個人に対して有する圧力はいかにして保持されているかを解くことにもつながると指摘されている。

第三章ではエスノメソドロジの形成に貢献した知的伝統として現象学と言語学に触れられている。フッサールは、社会的世界を事実と見る人々の素朴な態度がいかに作られているかこそ問題であるとし、世界の事実性を所与として受けいれる自然的態度が社会的産物であることを明らかにした。シュッツは、社会的世界の意味を理解するとき「当事者による解釈」が重要

であることを説き、科学的思考法とは異なる日常的思考法そのものを研究課題とした。またシクレルは言語学から「解釈手続」という発想を得、それを展開させて「意味の生成モデル」を構想したとき、会話や行為の意味をその文脈状況から離れ、社会規範や文法のルールに従って理解することを強く批判したとされている。第四章では、日常知に関連した現象のうち、その自然的態度すなわち社会的構造感について記されている。社会学者を含めて人々は、社会的世界を個人の知覚からは独立した事実的環境として認知したうえで様々な行動をなし、あるいはそれに解釈を施している。このように日常知の利用はそれが自然に行なわれるものであるがゆえに、その認知のされ方、利用のされ方を研究するには特別の努力と視点の転換が必要になるという。そこで提示されてくるのが、社会的世界の事実性とはその都度ごとに一連の作業を通して成員により解釈され描写され収集され構成されたものと理解してみようという方法であり、それにより社会的世界の事実性が形成され使用され維持される過程に肉薄することが可能になると示唆されている。

第五章では、社会的構造感と人々の行なう叙述との関連について触れられている。人々の解釈を通し不断に形成されてゆくものと社会的構造感を想定するとき、かかる想定的基础にあるのは、人々の会話や行動や事物などの叙述に付着している文脈状況表示性と文脈状況再帰性なのである。文脈状況表示性とは、人々の会話や行動などの意味を確定するにはそれがなされた

(場に固有の)文脈状況を離れてはなしえぬことを言うが、そこに含意されているのは、これらの意味が機械的構成物としての文脈に即して解釈されるがゆえに、そのことが意味の事実性の維持にも寄与しているという点である。またここから、文脈状況再帰性も導きだされている。つまり、何らかの意味を伝えようとする叙述は、その叙述がなされている場の状況を明らかにすると共に、その叙述の意味は場から与えられる(暗黙)の知識に依存しているというのである。このように、社会的構造感の反復循環的形成という観点に立つと、従来の社会学で用いられてきた「文脈状況から分離しているがゆえの意味の安定性」ないし「人々の間における認知の合意」という前提に基づくことはできず、それゆえにこそ新たな意味理論の枠組が模索されるのである、と述べられている。

第六章では社会秩序が取りあげられている。認知の産物としての社会的世界を知覚とは独立した客体のごとく解釈する作業の記述を行なうエスノメソドロジーは、社会のうちに秩序があるという事実性の感覚がいかに組立てられているかも知問うことになる。こうした社会秩序感覚を維持するために用いられるのは人々の行なう描出的叙述であるとされ、そのなかでもエスノメソドロジーが特に課題とするのは、人々が出来事を相互主観的世界のなかの出来事として見ようとするために用いる描出的叙述作業を記述することにあるという。そしてかかる描出的叙述作業には、社会的世界の事実性にさかのぼる「原型逆及的

「解釈方法」と、個別的出来事を社会的出来事に変える日常的やりかたの「解釈手続」とがあると言われてきたものの、じつは後者は前者を構成する作業であることが強調されている。

第七章では、相互作用と規範に対するエスノメソドロジীর取り組みが示されている。まず論じられているのは、社会的相互作用を理解するとき、演繹的因果説明の原因主体たる地位を社会規範が取りえないという点である。なぜなら、規範と行動との間には文脈状況再帰性の関係があり、因果の区別を設けることが無理だからである。つまり、動機や人物類型を含め規範は、人々の行動を理解し解釈するための補助的枠組として使用されているからである。次に論じられるのは、社会的相互作用、特に発話を構成要素とする対面的相互作用が構築されるとき、その中心的過程をなすのは解釈作業であるという点である。なぜなら、相互作用も解釈を必要とする文脈状況表示性を備えているがゆえに、相互作用は様々な解釈作業の方法を用いるやりとりのなかで相互主観的に創られ、かつ理解されているからであるという。最後の第八章では前章までの議論が要約されるとともに、エスノメソドロジীর持つ学問的意義は、「間接的データの分析や公理演繹理論の構築にいそしむ」〔三五五頁〕今日の社会学に対し、それとは全く異なるアプローチの成立を提示することにあらとまとめられている。

さて本書を読みおえての感想は、エスノメソドロジীর基本論点を簡潔に提示したいという著者の意気込は、しっかり論

理構築されているとの印象につきるであろう。そうは言っても本書が、エスノメソドロジーストの研究事例を豊富に引用しながら従来の社会学理論を批判することで、あるいはエスノメソドロジীরに寄せられたこれまでの批判に多数の事例を用いて反駁することで、エスノメソドロジীর基本的論点を明確にしてゆくという構成をとっているため、時にその事例の多さに圧倒され読みにくさを覚えてしまうことのあるのは否めない。さらには、どちらかといえばそうした事例が部分的あるいは断片的に提示されているため、エスノメソドロジীর理論的展開過程やエスノメソドロジースト相互の理論的異同に関連づけ、その基本的論点を把握するにはいささかの困難が伴おう。だが著者の意図よりすれば、そうした点は犠牲にしても、全体としてのエスノメソドロジীর何をめざしているかを明らかにすることが大事なのであり、その意味でエスノメソドロジীর輪郭を鮮明にしたいという著者の目的は十分に達成されていると言えよう。またそうした方針を理解するならば、従来の社会学理論に対する批判に二、三見うけられる誤解についても細かくあげつらう必要もあるまい。ただ欲を言うなら、エスノメソドロジীর今後について著者の展望を聞いてみたい気持がするだけである。エスノメソドロジীরは、社会的構造感を生々々生成維持する方法を記述するだけで満足し、社会学のなかの自省的パラダイムに止まってゆくのだろうか、もしくは全く別個の社会学を樹立してゆくのだろうか。それともエスノメソドロジীরは、従来

の社会学、特に実証主義的 sociology が採用してきた因果論的科学研究の方法論の廃棄まで求めてゆくのであろうか。あるいはエスノメソドロジは、理論的説明の枠組を時に条件づけ時にその基礎を提供するというやりかたで、科学的説明との接合をはかつてゆくのであろうか。こうした点につき本書は明快に答えてはくれないが、エスノメソドロジが持つ知的インパクトをみごとに描きだしている点は一読に値すると言えよう。なお原文と比較したわけではないが訳文はよく推敲されていて平易である。また訳者あとがきには簡潔明瞭な用語解説も付されており、術語の訳しかたを含め評者にも大いに参考となり、本評においてもさっそく利用させてもらったことを記しておかねばなるまい。

(新曜社、一九八七年)

霜野 寿亮